

イヌとオオカミとの判別について

－日本におけるイヌの起源をめぐって－

The Distinction between Dogs and Wolves

－ concerning the Origins of the dog in Japan －

小野田 正 樹

1

イヌは一般に人類の手により最初に飼養された動物である、と言われている。これについては、イヌの祖先は何であるのか、それはいかなる過程を経て飼養されるに至ったのか、それは最初どこで、いつ頃開始されたのか、また、イヌはある特定の地域で家畜化された後、世界の各地域に伝播し、その分布を次第に拡げていったのか、それとも世界の各地域で、他の地域とは全く無関係に独自に家畜化が達成されたのかなど、多くの問題がある。しかしながら、これらについては多方面からの検討がなされているが、資料自体の絶対量が少ないこともあり、その解明が十分進んでいるとは言い難い。

例えば、イヌ飼養の起源について、今西錦司博士は次のように説いている。

「狩猟採取生活者とイヌとの結びつきは、むかしむかし、イヌの祖先が、狩猟採取者のキャンプへやってきて、人間の食いのこしをあさったり、食いのこしのないときには、人間の排泄物をもとめたりしているうちに、だんだん両者が仲よくなるようになり、いつごろからか、イヌは人間社会に編入されて、準家族として待遇されるようになった。」

こうした博士の見解は広い支持を受けている仮説の一つとは言えるが、遺跡から出土しているイヌ属の遺骸からそれを実証しようとなると、なかなか難しい。そもそも、先史時代の遺跡から出土しているイヌ属の骨の同定は、それほど容易なわけではない。特に、出土した標本が時間的に古く遡る資料であればあるほど、即ちイヌの祖先に近い標本であればあるほど、それを単に観察しただけでは、その標本が野生の段階のものなのか、あるいは人間集団の回りに棲みついて、「taming」された段階に入っているものなのか、それとも既に飼養された真正のイヌ（家犬）の段階のものなのかを正確に見極めることは、常日頃多くのイヌ属の標本に接している研究者といえども非常に難しい、と言う。加えて、遺跡から出土する骨は全身骨格がほぼ揃っている場合もごく稀にはあるが、多くの場合は散乱骨で発見され、しかも数量的にも限られているので、ともすると判別基準を何に求めるかによって、標本の同定の際に異なった結論が出る場合がままある。このことは、更新世末から完新世初頭にかけての時期の遺跡から出土したイヌ属の標本 — 例えば、西南アジア、イラク北東部のPalegwra洞穴出土の標本や、イギリス、中石器時代のStar Carr遺跡出土の標本など — が、イヌの祖先として有力視されているオオカミのものか、それとも既に家畜化されたイヌのものかを巡って多くの議論があったことから窺い知れよう。イヌとオオカミとを何を基準にして判別するかは、イヌの家畜化の起源を考察する場合最も重要な問題であることは、今更述べるまでもないことである。然るに、これがなかなか厄介な問題なのである。

そこで、こうした点を踏まえ、前稿では、まず、イヌの祖先の問題を取り上げ、オオカミ説が有力であることを述べ、次に、家畜化の起源を解明する手掛りとなる、遺跡から出土しているイヌとオオカミとを何を基準にして判別すべきかについて検討してみた。その結果、両者の判別基準を下顎の第1後臼歯 (M_1) の長さ求めるべきである、としたDavisとValla両氏の見解が最も説得力ある説であることが明らかになった。

即ち、西南アジアの更新世末から完新世初頭にかけての時期の遺跡から出土しているイヌ属の標本のうち、イヌと同定されている資料の M_1 の長さは、例えばAin Mallaha 例 (約12,000年B.P.) は22.6mm、

Hayonim 段丘例 (約12,000年B.P.) は~22.2mm, Palegwra例 (約12,000年B.P.) は21.9mm, Jerico例 (約10,000~4,000年B.P.) は22.0mm, Çayönü 例 (約9,000年B.P.) は21.8mmと21.7mmであり, 何れも22mm前後であった。これに対して, 西南アジア各地に棲息していた, 時間的に並行する更新世後期のオオカミのM₁の長さは29mm前後もあり, 前述のイヌと同定されている標本と比べると7mmも長い。両者のM₁の長さには明確な相違が認められるのである。また, 現在西南アジアに棲息している現代オオカミのM₁の長さは24.3~27.4mmの範囲にあり, 更新世後期のオオカミのM₁の長さ29mmよりはるかに短くなっているが, イヌと同定されている標本のM₁の長さの範囲とは重複することはない。このことから, M₁の長さが22mm前後であるAin Mallahaなどから出土している標本は, 更新世のオオカミでも, また現代オオカミでもないことは明白であり, 明らかに家犬であると見做すことができるのである。

ところで, 日本列島でも古くから縄文文化期の遺跡, とりわけ貝塚からイヌ属の標本が出土していることが報告されていた。そして, 1920年代後半から, 貝塚出土のイヌ属の標本を何を基準にしてイヌとオオカミとに分けるかを巡って, 長谷部言人博士と斉藤弘吉氏との間で論争があった。その経過については前稿に譲るが, 両者の判別基準をM₁の長さに求めるべきである, としたDavisとValla両氏の見解に導かれて, その後発見された資料を含めて考えてみると, 縄文文化の遺跡から出土しているイヌ属の標本のうち, M₁の長さが24~28mmの範囲に含まれる資料は明らかにオオカミであると言える。これに対して, 縄文文化期のイヌのM₁の長さは, 時期や地域における偏りは認められず, 全時期を通じておおよそ18~20mm前後の範囲に収まっている。そして, 現在のところM₁の長さが最長の資料は, 古く岩手県大洞貝塚B地点で長谷部言人博士によって採集された22.0mmの標本である。大洞貝塚では他に21.0mmの標本も発見されており, 両者共縄文晩期の時期と考えられている。因に, 最近の調査によると, 縄文後期から晩期にかけての時期の土器が出土している宮城県田柄貝塚から21.0mmの標本 (平均値は19.5mm) が, そして縄文晩期中葉頃と考えられている同前浜貝塚からも同じく21.0mmの標本がそれぞれ出土している。然るに, 勿論24mmにも及ぶイヌの資料はない。

このように, 縄文文化の遺跡から出土しているイヌとオオカミの標本は, M₁の長さを判別基準にして考えてみると, M₁の長さが24~28mmの範囲に含まれるオオカミと, 全時期を通じてほぼ18~20mm前後の範囲に収まり, 最長のものでも22.0mmしかないイヌとに明確に分けることができるのである。そして, 両者のM₁の長さの範囲は決して重複することはないのである。

ところが, M₁の長さが前述したイヌの範囲にも, オオカミの範囲にも含まれないイヌ属の標本がいくつか発見されているのである。即ち, M₁の長さがイヌの最大値22.0mmよりはるかに長い, オオカミの最小値24mmよりも短い標本がそれである。例えば, 長野県原村中学校近傍遺跡からはM₁の長さが23.8mmの標本が出土しているし, 宮城県上川名貝塚から出土している標本はM₁の長さが23.1mmであった。また, 山口県秋吉台の石灰洞のひとつ丸山の穴からはM₁の長さが22.2mmの標本が出土しており, 「更新世後期」の「wild dog」として報告されていた。これらの標本は, 日本列島におけるイヌの起源やその系統を巡る様々な問題を考える上で何らかの手掛りを与えてくれるものと考えられる。なかでも, 丸山の穴例は, M₁の長さがAin Mallaha例やHayonim段丘例などで代表される, 西南アジア出土の最古のイヌの資料とほぼ等しいことから, イヌ飼養の起源にごく近い資料である可能性も考えられないわけではない。この点で, 丸山の穴例は甚だ興味深い資料と言えるのである。

M₁の長さが従来のイヌの範囲にも, オオカミの範囲にも入らない, これら三例の標本の実態はいかなるものであろうか。オオカミが飼養された段階のものであろうか。はたまた既に家畜化された真正の家犬であろうか。それとも全く別の考慮が必要であろうか。それにしても, これらの資料は一体どのように考えたらよいのであろうか。

そこで, 本稿では, それら三点の標本を取り上げて具体的に検討すると共に, 併せて日本列島におけるイヌの起源やその系統を巡る若干の問題について考えてみることにしたい。

2

本節では、第1節であげた三点の標本について具体的にみていくことにしよう。

(1) 長野県原村中学校近傍遺跡出土の標本

原村中学校近傍遺跡からM₁の長さが23.8mmあるイヌ属の標本が出土していることを直良信夫博士が報告している。遺跡は縄文後期の遺物を豊富に包含しており、本標本も縄文後期の時期の所産と考えられている。本標本は、M₁の長さもさることながら、手厚く葬られていた、というその出土状態に大きな特色がある。即ち、深さ60cm前後の楕円形のピットを掘り、その中に頭部を北東に向け、右側を下にして横向きに伸展させ、多少背中を彎曲させて死骸を葬っている。そして、周辺の土を堅く詰め込み、その上に自然石を載せ、最上部には板状の石塊を合掌式に組み合わせて並べ、土を被せてあった、と言う。因に、縄文文化の遺跡からは、例えば、イヌの埋葬例として夙に有名な前期の神奈川県西ノ谷貝塚例や、晚期中葉の愛知県伊川津貝塚例のように、埋葬施設としてピットを掘り、その中にイヌの死骸を葬った事例が報告されているのである。従って、本例に関しても、出土状態だけからみて、手厚く葬られた死骸をイヌであると考えたとしてもそれほど不思議ではない。

然るに、23.8mmある標本のM₁の長さは、18~20mm前後ある縄文文化期のイヌと比べると著しく長く、縄文犬の中でも最長の資料である大洞例の22.0mmよりも1.8mmも長い。寧ろ、M₁の長さは、斉藤弘吉氏が報告している「石器時代の狼」(年代的には「紀元前5,000年前から紀元前後」までの資料。青森県亀ヶ岡遺跡、岩手県大洞貝塚、宮城県門前貝塚、同青島貝塚、東京都東貝塚、同小豆沢貝塚、神奈川県杉田貝塚、静岡県蜷塚貝塚、愛知県保美貝塚、富山県大境洞穴、奈良県橿原遺跡、高知県佐川洞穴の十二遺跡から出土した標本)のM₁の長さ24~28.2mmの範囲からは若干外れはするが、青島貝塚出土のオオカミのM₁の長さ24.0mmに極めて近い。

また、下顎骨長についても、縄文犬との間に大きな差異が認められる。本例の下顎骨長(下顎連合部前端。I歯槽前辺-髁状突起)は150.0mmである。これに対して、縄文文化期のイヌでは、例えば福島県三貫地貝塚出土の中型犬の下顎骨長(下顎連合部前端-髁状突起)が114.5mmであったし、同じく中型犬の標本である秩父市大田品沢出土のイヌの下顎骨長(下顎連合部前縁-髁状突起)は120.0mm、また、愛知県本刈谷貝塚出土の小型犬三例の下顎骨長は、それぞれ99.4mm(C前縁-髁状突起)、85.7mm(C前縁-髁状突起)、106.0mm(I前縁-髁状突起)であった。

このように、縄文犬の下顎骨は何れも本例の150.0mmよりもはるかに短いものであった。寧ろ、本例の下顎骨長に近い資料は、「石器時代の狼」や江戸時代以降に採集された「現代日本狼」のものである。即ち、斉藤弘吉氏が計測した標本を参照すると、「石器時代の狼」の下顎骨長は、前述した十二遺跡出土の資料のうち佐川洞穴を除いた資料では、最小のものは150mmで、最大は157mmあり、そして佐川洞穴出土のオオカミは最小で165mm、最大で176mmであった。また、江戸時代以降に採集された「現代日本狼」は、若年を除いた資料で最小のものは150mm、最大は172.3mm、17個体の平均は159.19mmであった。

従って、下顎骨長からみる限り、本例は石器時代以降のいずれかの時期のオオカミである可能性が極めて高い。

また、骨相や大きさについても、直良博士が指摘しているように、家犬としての特徴を十分備えているとは言い難く、ニホンオオカミ的である。

これらのことから、本資料は、同時代のイヌと同様手厚く葬られているという出土状態に大きな特色は見られるが、イヌであるとするには無理がある。寧ろ、オオカミであると考えられる。このことは、DavisとValla両氏の研究からも頷ける。

但し、オオカミにもかわらず、イヌと同じような方法で厚葬されている点は、本標本を考える上で重要である。このことは、M₁の長さや下顎骨長などの大きさがオオカミの範囲から多少外れていることでもわかるように、本標本が典型的な石器時代のオオカミより多少小型である点と関係があろう。これに関して、直良博士は、本標本と野生のニホンオオカミとの相違点として、吻部上面のしゃくれ方がや

や強いこと、上顎骨の高さが家犬のように概して高いことを挙げ、本資料を「ニホンオオカミの家犬化したもの」、即ち「飼養されていたニホンオオカミ」であろう、と考えられた。現在のところ、縄文文化の時期でニホンオオカミが手厚く葬られていた事例は報告されていないが、イヌと同様に埋葬されていたことを考えると、博士の見解は認められてよいと思われる。本標本は、例えば、人間の食物を漁りに人に近づき、遺跡の周辺に棲みついてその食べ残しで生活するようになったオオカミ、言わば「tamed」されたオオカミのものである可能性が強い。おそらくM₁や下顎骨が野生のオオカミのものより小型化しているのは、そのことを示唆している証左と言えよう。こうした「tamed」されたオオカミについては諸外国からも多くの事例が報告されており、野生のオオカミとの間に頭骨や歯の短縮化などの形態的差異が認められることが指摘されていた。

これらのことを考えると、本標本がイヌと同様に厚葬されていたことも自ずから納得できることと言える。

以上、M₁の長さが23.8mmある原村中学校近傍遺跡から出土したイヌ属の標本について述べた。標本は縄文後期の所産と考えられている。本例は、同時期のイヌのように葬送施設を作って手厚く葬られており、特殊な出土状態を呈している点に大きな特色があった。然るに、M₁の長さや下顎骨長をはじめ骨相や大きさからみて、家犬でも、また全くの野生状態のニホンオオカミでもなく、「ニホンオオカミの家犬化したもの」であることが明らかとなった。但し、こうした事例は日本列島内からは現在のところ全く報告されていない。いずれにせよ、縄文後期の頃、イヌと並行してニホンオオカミが飼養され、死後厚葬されていた事実は殊の外興味深いものがある。

(2) 宮城県上川名貝塚出土の標本

次に問題となる資料は上川名貝塚から出土した、M₁の長さが23.1mm、頭蓋骨長が207.0mmあるイヌ属の標本である。もしも本標本が縄文文化期のイヌであるとすれば、この時期には類例のないほど大型の標本ということになる。この意味で、標本は破損してはいるが、頭骨や下顎骨が残っているので、極めて興味深い資料と言える。しかし、残念ながら表面採集されたものであり、年代は明確でなかった。因に、上川名貝塚では上下二枚の貝層が確認されており、下層の貝層からは縄文早期後半の上川名Ⅰ式土器が、そして上層の貝層からは縄文前期初頭の上川名Ⅱ式土器がそれぞれ出土している。

本資料については、それを大型犬とする長谷部言人博士や直良信夫博士の意見がある一方、それを否定する意見もあり、その評価は分かれている。

そこで、以下ではM₁の長さを中心にして標本を検討してみることにする。

まず、本標本のM₁の長さ23.1mmを、斉藤弘吉氏が調査した日本列島にかつて棲息していたオオカミなどの資料と比較してみよう。

「日本化石狼」(更新世のオオカミ)のM₁の長さは、最小のもので29mm、最大のもので34.5mmもあり、最小のものとも比べても本例は5.9mmも短い。このことから、本例は更新世のオオカミではないと言える。

次に、本標本が縄文犬でないと仮定すれば、その可能性が最も高いと考えられる「石器時代の狼」と比較してみよう。「石器時代の狼」のM₁の長さは、前述したように、最小で24mm、最大のもので28.2mmであった。従って、本例のM₁の長さ23.1mmはその範囲からは明かに外れてしまうことになり、最小のものとも比べても0.9mmも短い。因に、(1)で検討した、縄文後期の所産で、「飼養されていたニホンオオカミ」と見做された原村中学校近傍遺跡出土の標本はM₁の長さが23.8mmであった。イヌをはじめ他の動物でも家畜化によってM₁の長さや下顎骨が短縮化することが指摘されているので、上川名例が仮に野生のオオカミであるとすれば、「飼養されているニホンオオカミ」であった原村中学校近傍例よりM₁の長さが短いことなど動物学的には考え難いことと言わねばならない。このように、M₁の長さからみる限り、本標本は「石器時代の狼」ではないと言える。

江戸時代中期以降に採集された「現代日本狼」のM₁の長さは、若年を除く資料に限ってみると、最小のもので24mm、最大のものは28.51mmあり、22個体の平均は25.61mmとなっている。従って、本例のM₁の長さは「現代日本狼」のその範囲からは外れており、22個体の平均値よりも2.51mmも短く、最小の標本と比べても0.9mmも短い。故に、本標本は「現代日本狼」とは考え難い。なお、「現代日本狼」のM₁の長さの範囲が「石器時代の狼」のそれとほぼ重なっている点は注意を要する。

次に、本例を、明治中期頃まで北海道に棲息していた「現代北海道狼」や、かつて朝鮮半島に棲息していた「現代朝鮮狼」のM₁の長さと比較してみると、前者のM₁の長さの範囲は26~31mmで、平均すると29mmあり、上川名例よりもよほど大型であることがわかる。また、後者のM₁の長さは24.7~27.5mmで、平均は25.68mmであった。この測定値は前述した「現代日本狼」のそれとほぼ等しく、平均値でも上川名例より2.58mmも長い。

このように、本標本のM₁の長さ23.1mmは、かつて日本列島に棲息していた「日本化石狼」(29~34.5mm)、「石器時代の狼」(24~28.2mm)、「現代日本狼」(24~28mm)のM₁の長さの範囲には勿論のこと、関連資料として挙げた「現代北海道狼」や「現代朝鮮狼」の範囲にも全く含まれないのである。故に、M₁の長さから判断する限り、本標本はオオカミではないということになる。寧ろ、本標本のM₁の長さは家犬に近いと言えるのである。

但し、ここで問題が残るとすれば、本標本の頭蓋骨長(前上顎端-上部後頭骨端)が207.0mmもある点である。この頭蓋骨長は、縄文犬のそれが140~170mm程度であるのに比べると著しく長く、縄文犬との間には大きな差異が認められる。管見による限り、縄文犬の中には本標本に匹敵するような長さの頭蓋骨長を持つ資料はない。しかも、この値は(1)で検討した原村中学校近傍遺跡出土の「飼養されていたニホンオオカミ」の頭蓋骨長の推定値208mmとほぼ等しいのである。こうした点を考えると、本例は家犬ではなく、後世のニホンオオカミではないか、とする疑問も当然出てくるわけである。そこで、本標本の頭蓋骨長を他の資料と比較してみることにしよう。なお、予め断っておくが、縄文文化期のオオカミには比較すべき良好な資料はない。

齊藤弘吉氏の計測資料に拠ると、江戸時代中期以後に採集された「現代日本狼」の頭蓋骨長は、最小のもので203mm、最大のものは236mmあり、15個体の平均値は216.9mmであった。因に、「現代朝鮮狼」の資料は219~252.3mmで、平均は233.4mm。「現代北海道狼」は238~279mmで、平均は263mmである。また、直良博士が報告している、江戸時代前期から明治末年にかけて採集された6個体のニホンオオカミの頭蓋骨長(I'前辺-上部後頭端)は、最小のものは静岡県十里峠産の200.5mmで、最大のものが神奈川県札掛産の226.0mm、平均は214.3mmであった。従って、頭蓋骨長を基準にすると、本例は明らかに「現代日本狼」の範ちゅうに含まれ、その中でも小型の標本であるということになる。

然るに、前稿でも検討したように、イヌとオオカミとを判別する最も重要な基準はM₁の長さであり、頭蓋骨長はその基準とはならないのである。従って、たとえ本例の頭蓋骨長が「現代日本狼」のその範囲に含まれるからといって、それだけを根拠にして本例を「現代日本狼」であるとは言えないのである。既に検討したように、本例のM₁の長さは、かつて日本列島に棲息していたオオカミのM₁の長さの範囲には勿論のこと、「現代北海道狼」や「現代朝鮮狼」のM₁の長さの範囲にも全く入っていなかったのである。そして、それは寧ろ家犬に近かったのである。

このことは、オオカミとの骨学的相違を指摘し、本標本を大型家犬であると見做した直良博士の見解とも一致している。

即ち、博士はオオカミとの相違点として次の点を挙げている。まず、頭骨に関する最も著しい相違点は、本標本の前頭骨がやや幅広くて上面が甚だしく凹み、上顎骨上辺のくびれが強く、しかも眼後突起後辺のくびれが著しい点である。他に、頭頂骨の膨らみが少し鈍く、後頭三角面は高く、後鼻孔が小さい点、そして殊に鼓骨が小型であって膨らみがない点も指摘されている。次に、下顎骨に関しては、下顎骨体が甚だ厚く、かつ体高が高いのに比べて、下顎骨長が短い点が指摘できる、と言う。また、頤孔に関して、下顎第1頤孔は普通であるが、第2頤孔は甚だ小さく、第3頤孔は第2頤孔とほぼ同じ大き

さでP₃の中央下に開いているが、これは現生家犬には見られないものである、と言う。因に、博士のこの指摘は、本標本が貝塚形成当時ではなく、後年になって埋められたものが掘り出されたものである、とする想定を否定する根拠となりうるものと考えられるので、極めて重要である。これについては後述する。

なお、M₁については、性状は現生のシベリアオオカミのものと同様であるが、大きさはシベリアオオカミよりはるかに小型であり、従って、P₁-M₃までの歯槽長もシベリアオオカミよりずっと短い点を挙げている。

以上の諸点から、直良博士は、本標本をオオカミではなく、大型の家犬であると考えたのである。

以上、本標本のM₁の長さを様々な種類のオオカミのそれと比較し、本標本がオオカミではないことを述べた。とすれば、それはイヌで、しかも大型犬の標本である、としか考えられないことになる。

そこで、まず、本標本のM₁の長さを縄文犬のそれと比較してみることにしよう。

再三述べているように、縄文文化期のイヌは通例M₁の長さが18~20mm前後であり、最も長い大洞貝塚出土の標本でも22.0mmであった。従って、23.1mmある本例は大洞例より1.1mm、そして典型的な縄文犬よりも3~5mm程度長いことになり、これまで報告されている縄文犬のM₁の長さの範囲からは明らかに外れてしまう。これは素直に解釈すると、本例は縄文文化期のイヌではない、ということになる。然るに、縄文文化期のイヌの中に類例を見出すことができないからといって、本例が縄文犬でないとして言い切れるであろうか。問題はそれほど単純ではあるまい。

それでは、これは一体どのように考えたらよいのであろうか。これについては次のような可能性が想定できるので、順次検討していくことにしたい。

1. これまで報告されている縄文犬の中に類例を見出すことはできないが、それらとは全く異なったタイプのイヌである可能性
2. 縄文文化期の大型犬ではなく、それ以降の何れかの時期の大型犬 — 例えば、秋田犬などのような大型犬 — である可能性

1. については、直良博士が、本標本を、樺太敷香地方に居住するオタスの人々が飼養している現生の大型犬と骨学的特徴が極めてよく似ていることから、現生樺太犬の大型に属する一類であろう、と想定し、その系統が北方方面に求められる、とする見解を明らかにしている。こうした博士の見解は、上川名犬とオタスの現生家犬との実物資料に基づく比較研究から導き出されたものであり、科学的な論証として重視すべきものがある。

ところで、北海道のオホーツク文化と並行する時期の所産と考えられる、樺太の貝塚から家犬が出土していることが報告されている。総じて大型のものが多く、中型がそれに次ぎ、小型のものは稀である。しかし、これらの樺太出土の貝塚犬は一般に大型ではあるが、オタスの現生家犬とはいろいろな点で異なっており、オタスの現生犬が貝塚犬の後裔とみることには問題がある、という。とすれば、オタスの現生大型犬の祖型が何であるのか、そして、それが時間的にどこまで遡りうるかが問題となるが、しかし今のところそれを実証する資料は得られていない。また、縄文文化と並行する時期の樺太における家犬の実態についても明らかになっていないと言える。

更に重要な点は、本例の系統が、仮に直良博士が主張されるように北方方面に求められるとしても、現在のところ中間地帯の様子がはっきりしていないので、日本列島への道が続いているとは言い難い。この点で、博士の見解は依然仮説の域を出ていないと言える。

因に、北海道では、天都山貝塚と東釧路貝塚第Ⅲ文化層から出土した、縄文早期末の時期のイヌの標本の計測値が報告されている。即ち、天都山例は頭蓋骨長が180±mmであるがM₁の長さは20.1mm、また東釧路貝塚例はM₁の長さが19+mmであった。両標本共、M₁の長さは縄文文化期のイヌの範囲に収まっており、今のところこの時期からは上川名例のような大型のイヌは報告されていない。

以上述べてきたように、本例は、その骨学的特徴が樺太、オタスの現生大型家犬に極めてよく似ていることから大型家犬であることに疑いはないが、縄文文化期の所産とする根拠は今のところ得られていない。しかし、本資料が公表されるいきさつに深く関わっていた当事者の一人である江坂輝弥氏は、大型犬の遺骸は「1949年頃」「縄文時代前期初頭の土器とともに」「地元の小学生が発掘」したものであり、「種々話を総合すると」、「埋葬骨が貝塚の貝層中にもあったようにも思われる」と言う、極めて注目すべき発言を行っている。もしこの江坂氏の言が正しいとすれば、本例は明らかに縄文前期初頭の上川名Ⅱ式の時期の貝層から出土した大型犬ということになる。しかし、いかんせん現在に至ってはその出土状態を確認する手立てはないので、本標本が上川名貝塚から採集されたことは事実であるが、何れの土器に伴って出土したかなどの詳細については依然不分明のままであると言わざるをえない。

なお、付け加えると、上川名貝塚からは大型犬と共に、モウコノウマの左側肩胛骨が出土している。これは甚だ重要な事実と言える。モウコノウマに関しては、古く埼玉県水子大応寺前貝塚でも、竪穴住居址の隅の殆ど床面に接した貝層から上顎後臼歯が一点発見されており、縄文前期末の時期と考えられていた。しかし、残念ながらこの資料は先の戦災で消失してしまった、と言う。周知のように、モウコノウマは華北・蒙古・満州を含めた東北アジア一帯を原産地としており、その方面に系統を求めることができる。上川名出土のモウコノウマは野生馬ではなく、既に家畜化されたものが人間の手により日本列島に持ち込まれたものと考えられる。しかし、本資料については直良博士が検討しているのみであり、殆ど取り上げられることもなく、黙殺されていると言ってよい。大型犬といい、モウコノウマといい、それらの系統が何れも北方大陸方面に求められることは偶然の一致ではあるまい。ここにも新たな問題の展開が予想されるので、何れ他の機会に論じたいと思う。

以上、第1の可能性について検討してきた。それに拠ると、本標本は、直良博士が指摘しているように、その骨学的特徴が樺太オタスの現生大型家犬に極めてよく似ており、大型犬であることに間違いはない。しかし、現在のところ縄文文化期のイヌの中に類例を見出すことはできない。また、所属時期は表面採集資料であるため明確にすることはできないが、上川名貝塚から出土したことが事実である以上、江坂氏が主張しているように縄文前期初頭の上川名Ⅱ式の時期である可能性も十分考えられる。これは、次に述べる第2の可能性と関連する問題である。

なお、大型犬は東北アジア方面や樺太にその系統が求められる、という。とすれば、本例に関しても、現在日本列島内に系統を辿ることができる大型犬が見当たらない以上、大陸方面から北方経由で日本列島内に持ち込まれた可能性が十分考えられることになる。即ち、小型犬とは全く系統を異にするイヌが日本列島内に流入したわけである。日本列島内に類例が皆無なことは、このことと関係があるのであろうか。

次に、第2の可能性について検討してみることにしよう。

本例については、表面採集資料であったことや、縄文文化期のイヌの中に類例が見出せなかったことなどを根拠にして、縄文文化期の大型犬ではない、とする意見がある。もしこの意見が正しいとすれば、本例は縄文文化以後現在までの何れかの時期に棲息していた大型犬である、ということになる。しかし、縄文文化以後の時期になると、遺跡からイヌの遺骨が出土する例は極端に少なくなり、遺骨に基づいてイヌの変遷を辿ることは現段階では不可能に近い、と言える。勿論、現在日本犬として一般に容認されている大型種の秋田犬についても、その歴史は明らかでないし、東北地方の北部に大型犬がいつ頃から棲息していたのかは全く不明である。

因に、大森貝塚を発掘し、日本先史考古学の先駆をなしたE. S. Morse氏の“Japan Day By Day”の中に、明治11年(1878年)7月末の札幌地方のイヌに関する興味深い記述がある。氏に拠れば、この地方には当時「狐類似の犬」、即ち中型の日本犬としての北海道犬と、「エスキモーの犬」に似た家犬、即ち大型の樺太犬の二種がいた、と言う。Morse氏の記述から、少なくとも明治の初め頃、北海道では日本犬と樺太犬が共存していたことは理解できる。北海道では大型の樺太犬の存在が時間的にいつ頃まで遡り

うるのであろうか。モヨロ貝塚などのオホーツク文化の遺跡から出土している大型の家犬との関係はどうであろうか。はたまた秋田犬とは関係がないであろうか。これは甚だ興味深い問題と言えるが、その実態は明らかでない。

そこで、ここでは比較資料が限られているので、仮に本例を現生の大型犬である秋田犬と比較してみることとする。

まず、「忠犬ハチ公」の名で夙に有名な秋田犬は、 M_1 の長さが23.5mm、頭蓋骨長が221.0mmであり、本例とよく似た大きさである。また、醍醐正之氏が報告している標本のうちの一体は、 M_1 の長さが 22.5 ± 0.68 mmで、頭蓋骨長が 196.5 ± 6.31 mm、他の一体は M_1 の長さが23.0mmで、頭蓋骨長が204.3mmであった。

これら三例の秋田犬の標本が何れも上川名の大型犬の大きさによく似ていることは、極めて注目すべきことと言わねばならない。特に、醍醐氏報告の后者の例は殆ど同大である、と言ってよい。従って、大きさだけからみる限り、本例を現生の秋田犬に属するものの一類ではなかったかともみることができよう。とすれば、本標本は、貝塚の近くで飼われていた秋田犬が死んだ時、たまたま縄文文化の時期の貝塚であったところに埋められ、それが後年掘り出されたものである、と想定できないわけではない。この点は、前述した江坂氏の見解と真向から対立することになる。

しかし、本例が現生の大型犬である秋田犬と同大であるからといって、本例を直ちに現生の秋田犬であると見做すわけにはいかない。前述したように、本例の下顎骨にあった下顎第3頤孔は、直良博士も指摘しているように現生のものには見られないものであった。これは、本例が現生の大型犬ではないことの一つの証左と言える。縄文文化期以降の遺跡から発見されるイヌの骨が極めて少なく、比較すべき資料に乏しい現在、この指摘は看過されるべきではあるまい。寧ろ、標本を実見した研究者であれば、骨の化石化の程度からその骨が縄文文化期のものか、それともごく新しい時期のものかは推測できるはずである。まして、数多くの遺骨を実見していた直良博士や長谷部博士、江坂氏などがこぞってその判断を誤ることなど到底考え難い。事実、今だかつて本標本を現生の大型犬である秋田犬に比定した研究者はだれもいなかったのである。このことは、標本の化石化が進んでいたために、本標本が縄文文化期のものであることを、多くの研究者が暗黙のうちに認めていたことを示しているものと思われる。

以上、第二の可能性について検討してきた。縄文文化期以降の時期には比較すべき資料が殆どないので、仮に現生の大型犬である秋田犬を取り上げて本例と比較してみた。本例は秋田犬と大きさはよく似てはいたが、下顎第3頤孔の存在など、現生家犬との差異も指摘でき、現生家犬であるとは見做し難い。しかも、直良博士らが、標本の化石化の程度によって年代を推定したさい、それを現生家犬のものと誤認したとは到底考え難い。然らば何れの時期の大型犬かと問われても、イヌの変遷を示す指標となるべき標本が殆ど得られていないので、現段階でそれを明らかにすることは不可能である。いずれにせよ、本標本が現生の大型犬でないことだけは確かである。

このように、本標本が何であるかに関して二つの可能性を想定し、それについて検討してみた。その結果、本標本が現生の大型家犬ではないと考えられることから、第2の可能性は成立し難い。寧ろ、従来の縄文犬の中には全く類例がない、それらとは系統を異にする大型犬である、とする第1の可能性の方が妥当性が強いと考えられる。但し、時期については縄文前期初頭の可能性も十分考えられるが、表面採集資料だったこともあり明確になしえなかった。

以上、上川名貝塚から出土した、 M_1 の長さが23.1mmあるイヌ属の標本について検討してきた。それに拠ると、本標本は、これまで報告されている縄文文化期のイヌの中に類例を見出すことはできないが、その骨学的特徴や M_1 の長さなどから見て、オオカミではなく、大型犬であることは明らかである。然るに、表面採集資料であったこともあり、それが上川名貝塚が形成された縄文文化期のものである、とする明確な根拠は見出しえなかった。但し、現生家犬には見られない下顎第3頤孔が存在する点や、標本

の化石化の程度などを考慮すると、本標本は、現生の大型犬ではなく、江坂氏が主張しているように、貝塚が形成された縄文文化期の所産である可能性が強いように思われる。

そして、大型犬の系統が東北アジア方面や樺太に求められる点、華北・蒙古・満州を含む東北アジア一帯を原産地とするモウコノウマの遺骨が伴出している点などから考えると、現在のところ中間地帯の様子ははっきりしないが、上川名の大型犬はモウコノウマと共に大陸方面から北方経由で伝えられた可能性が高いように思われる。即ち、従来の小型犬とは異系統のイヌが日本列島に流入してきた、というわけである。

いずれにせよ、本標本については関連資料が不足しているので、将来の資料の増加を待つことにしたい。

最後に、大型犬に関して若干つけ加えておくと、山形県日向洞穴から大型犬の軸椎が発見されている。大型犬は、隆線文・爪形文・押圧縄文土器の縄文草創期初頭の一連の土器群に伴って、石鏃や石槍の他、原郷土が北方大陸方面と考えられる局部磨製の片刃石斧や、山内清男博士によって「渡来石器」と認定された「矢柄研磨器」、「植刃」、「断面三角形の錐」、「半月形石器」などの文物と共に出土している。特に、隆線文土器に関しては、満州オロス貝塚から平底の隆線文土器が出土しており、草創期初頭の隆線文土器の大陸側のパートナーと考えられている。オロス貝塚からは、他に、細石刃、「断面三角形の錐」、長崎県福井洞穴にもある「有孔土製円盤」などの無土器終末から縄文草創期初頭にかけての時期に出現する文物や、北海道の縄文早期の時期に見られる大陸系の石刃鏃などが出土しており、これらと共に大型犬の遺骨が発見されていた。モウコノウマの遺骨もある。ここでは詳細に触れることはできないが、両遺跡で大型犬に伴出する文物に共通するものが見られることを考えると、オロス貝塚の大型犬は日向洞穴出土の大型犬の大陸側のパートナーになりうる資料であるかもしれない。日向洞穴の大型犬は「渡来石器」などと共に、人間の移動に伴って大陸方面から伝えられたのであろうか。これについては現在別稿を準備中であり、詳細はそちらに譲ることにしたい。

(3) 山口県秋吉台の丸山の穴出土の標本

問題となる第三の標本は、山口県秋吉台の石灰岩台地に分布する石灰洞のひとつ、丸山の穴から出土した、 M_1 の長さが22.2mmのイヌ属の標本である。本例は、風船穴、万倉地の穴、中尾洞の他の石灰洞出土の標本と同様、更新世後期の堆積層と考えられている「秋吉褐色粘土層」から *Nycterentes viverrinus* TEM. と共に発見されたもので、鹿間時夫博士らにより更新世後期の「wild dog」として報告されている。

本標本の M_1 の長さは、斉藤弘吉氏が計測した資料に拠ると、「日本化石狼」の29~34.5mm、「石器時代の狼」の24~28.2mm、「現代日本狼」の24~28mm（平均25.61mm）の何れの M_1 の長さの範囲にも含まれない。従って、 M_1 の長さからみる限り、本標本を日本列島にかつて棲息していたオオカミのものとすることはできない。しかも、秋吉台では、万倉地の穴で「秋吉褐色粘土層」から正真正銘の「ニホンオオカミ」の遺骨が出土しており、その M_1 の長さは本標本よりも4.8mmも長い27.0mmであった。「秋吉褐色粘土層」の年代はさておき、この時期に、秋吉台という狭い地域で共存していた、明らかにオオカミに比定できる標本よりも M_1 の長さが4.8mmも短いイヌ属の標本を、オオカミであるとは到底見做し難い。 M_1 の長さから判断する限り、本標本がオオカミでないことは明白である。残るのはイヌである可能性である。

因に、万倉地の穴の「秋吉褐色粘土層」から出土した「ニホンオオカミ」の M_1 の長さ27.0mmは、「日本化石狼」（29~34.5mm）よりはるかに小さく、その範囲には含まれない。寧ろ、それは「石器時代の狼」と「現代日本狼」、換言すれば完新世のオオカミの範囲に含まれている。これは、「秋吉褐色粘土層」の年代を考究するさいの重要な手掛かりとなる。これについてはかつてニッポンムカシジカの標本を含めて検討したことがある。詳細はそちらに譲るが、結論のみを述べると、「ニホンオオカミ」が出土

した「秋吉褐色粘土層」の年代は、鹿間博士らが推定した更新世の時期ではなく、完新世の時期の堆積層であったのである。とすれば、万倉地の穴と同様、「秋吉褐色粘土層」から出土している丸山の穴をはじめ、風船穴や中尾洞出土のイヌ属の標本も、完新世の時期のものということになる。しかし、残念ながら完新世でもいつ頃の時期であるかは明らかでない。

ところで、秋吉台から検出されているイヌ属の標本はM₁の長さについてみると、「秋吉褐色粘土層」から出土した本例以外の標本では、風船穴例が19.8mm、万倉地の穴例が18.8mmと19.0mmの二個体分、中尾洞例が19.6mmであった。この他に、鷹ヶ穴石灰洞からM₁の長さが21.4mm、下顎骨長が135.5mmの標本が表面採集されている。鷹ヶ穴例は「完新世前期」の時期と考えられているが、表面採集資料のため正確な年代はわからない。これらの標本の計測値は、何れも今まで報告されている、大型犬を除いた、完新世のイヌのM₁の長さの範囲に入っている。その上、現生家犬との間に異なった骨学的特徴を認めることができないので、これらの標本がイヌであることは間違いない。

そこで、本例のM₁の長さをそれらの標本と比較してみると、まず、同時期の「秋吉褐色粘土層」から出土した風船穴、万倉地の穴、中尾洞の三例のイヌよりも、本例の方が2.4~3.4mmも長い。そして、一般的な縄文文化期のイヌと比べても、本例は2.2~4.2mmも長いし、22.0mmある縄文犬の中で最も長い大洞例と比べても0.2mm長い。更に、時期は不明であるが、秋吉台出土の他の標本より大型である鷹ヶ穴例より0.8mmも長い。

このように、本例は、風船穴などから出土している同時期のイヌの標本とは大きさの点で著しく異なっていると言える。そして、これまで報告されている縄文犬のM₁の長さの範囲からも明らかに外れている。然るに、だからといって本例をイヌではないと見做すわけにはいかない。本標本は、風船穴などから出土しているイヌの標本と同様、骨学的特徴は現生家犬に極めてよく似ており、それとの間に著しい差異を認めることはできないのである。従って、本標本は、確かにM₁の長さが他の標本より著しく長い点は指摘できるが、現生家犬との間に骨学的な差異が認められないことを考えると、イヌであることは明白である。前述した、M₁の長さがオオカミの範囲から外れていることもそれを裏付ける証左と言える。

ところで、本標本に匹敵するM₁の長さをもつイヌの標本は、(2)で検討した上川名貝塚出土例を別にすれば、先に紹介した北海道、オホーツク海沿岸のモヨロ貝塚から出土している標本の中に類例を見出すことができるのみである。例えば、M₁の長さが22.5mm、下顎骨長(I'前縁-髁状突起)が135.0mmの標本(「A型」と呼ばれる標本)で、オホーツク文化の時期の所産であった。オホーツク海沿岸の諸遺跡から出土しているイヌの標本にはA型・B型の二種があり、特にA型の故郷は樺太と考えられている。しかし、残念ながらこうしたM₁が大型の標本が年代的にどこまで遡りうるかは今のところ明らかでない。また、資料も少ないので、本例との系統関係を論ずる段階でもない。

これに対して、本標本が、12,000年B.P.頃の¹⁴C年代が与えられ、世界最古のイヌの資料と考えられている、西南アジア出土のAin Mallaha例の22.6mm、Hayonim段丘例の~22.2mm、Palegwra例の21.9mmとほぼ等しいM₁の長さを持っている点は、誠に注目すべきことと言わねばならない。このことから、本例がそれら西南アジアの事例と同様、イヌの家畜化の起源にごく近い時期のものである可能性も考えられないわけではない。とすれば、日本列島でも西南アジアとは全く別個にイヌの家畜化がなされた、という想定もできよう。これはたいへん興味深い問題と言えるが、しかし、次のような疑問点も指摘できる。

更新世の時期に日本列島に棲息していたオオカミは、大型のシベリアオオカミ系のものであったので、それを飼養して縄文犬のような小型のイヌを作ったとは考えにくい。再三述べているように、縄文犬の歯がニホンオオカミのものに比べて著しく小さいことも、その証拠の一つと考えられる。また、家畜化の過程を示す証拠も現在のところ得られていない。寧ろ、日本列島のイヌは、縄文文化の開始の頃、土器や磨製石器、弓矢の存在を示す石鏃の、後の縄文文化に通有の文物と共に、大陸の何れかの地から伝えられたものであろうと考えられる。このことは、前述したが、万倉地の穴で「秋吉褐色粘土層」からイヌと共に出土した、「ニホンオオカミ」の標本が大型だったことから理解できよう。あるいは、大型

犬が出土している日向洞穴の事例は、そうした想定を裏付ける一つの手掛かりになるかもしれない。

因に、旧大陸のイヌについて、Clutton-Brock氏は、ヨーロッパと南アジアの大部分の家犬の祖先は小型の西南アジア型オオカミ、即ちインドオオカミ *Canis lupus arabs* であり、また、初期の中国犬の祖先は小型の中国型オオカミ *Canis lupus chanco* である、と述べている。こうした氏の見解は多くの研究者の支持を得ている。このように、オオカミがイヌの祖先である、とする説では、旧大陸のイヌの多くは小型のオオカミを家畜化したものである、と考えられているのである。従って、もしも日本列島内でイヌの家畜化が達成されたとすれば、当然日本列島の小型犬についても、旧大陸と同様、小型オオカミの家畜化が想定されようが、更新世後期の時期に、日本列島内にはイヌの祖先となりうるような小型のオオカミは棲息していなかったのである。棲息していたのは大型のシベリアオオカミ系のものであった。

また、本標本の年代についても問題が残る。本例は本稿で取り扱った他の標本と異なり、貝塚などのように年代が推定できる遺跡から出土したのではなく、石灰洞内に堆積していた「秋吉褐色粘土層」中から発見されたものであった。「秋吉褐色粘土層」の年代については既に述べたが、粘土層中から年代を示す考古資料が出土しているわけではないので、前述した完新世の時期ということ以外、正確な年代は明らかでない。

但し、「秋吉褐色粘土層」の年代については全く手掛かりがないわけではない。石灰洞のひとつであるタヌキ穴を発掘調査した河村善也氏に拠ると、第2層の下部から「凹基無茎鏃」が出土した、と言う。この石鏃は「縄文早期」のものとして推定されている。もしこの年代観が正しいとすれば、丸山の穴をはじめ各石灰洞でイヌが出土している「秋吉褐色粘土層」は、地質学的にみるとタヌキ穴の堆積層では第2層の上部に相当すると考えられているので、「秋吉褐色粘土層」の年代は、石鏃が出土している第2層の下部の年代、即ち「縄文早期」以降の何れかの時期ということになる。但し、石鏃は土器が伴出していないので、「縄文早期」の時期とは断定できないが、石鏃の形態から見る限り、縄文文化のものであることだけは確かである。しかしながら、河村氏が認定した層位はあくまでも地質学的見地からのものであり、第2層が考古学的に見て同一時期に形成された一枚の文化層であるかどうかは確認されておらず、従って、第2層の上部も縄文文化期の堆積層であるとは言えないのである。いずれにせよ、これは一つの手掛かりにはなるが、正確な考古代を決定できるほどの資料ではなかった。但し、氏の発掘調査により、「秋吉褐色粘土層」が完新世の堆積層である、とした、先に述べた私の見解が地質学的に裏付けられたことだけは確かである。

このように、本標本の年代については、縄文文化以降の何れかの時期、換言すれば完新世の時期ということは判明したが、正確な時期を決定しうる根拠は見出しえなかった。従って、今のところこれ以上議論の進めようがない。

なお、丸山の穴から大型のイヌが出土していることについては、後世のイヌが何らかの理由で混在した可能性が考えられないわけではない。これは、上川名貝塚出土の標本やオホーツク文化の時期の家犬など、ごく少数の事例を除いて日本列島内に類例を見出すことが難しいことが背景にあると思われる。然るに、そうした見解を主張される人が、後世の混在であるとする確かな地質学的証拠を挙げたこともないし、後世のイヌとは一体何を指すのかについても明言したことはない。とすれば、そもそもそうした意見は反論の体をなしているとは言い難い。因に、本洞穴の「秋吉褐色粘土層」からは本稿で検討したイヌの標本とは別の資料も出土しており、その標本は化石化がかなり進んでいた。そして、その程度は他の石灰洞出土のイヌの標本のそれと大差なかった。こうした点を考えると、「秋吉褐色粘土層」から出土したごく一部のイヌの標本のみを混在であるとして片付けてしまうわけにはいかなくなってくる。

いずれにせよ、出土状態については再度多方面からの検討が必要であり、その結論は暫く将来に残しておく方が賢明と思われる。

以上、秋吉台の丸山の穴から出土した、M₁の長さが22.2mmあるイヌ属の標本について検討してきた。その結果、本標本は、その骨学的特徴が現生家犬に極めてよく似ていて、オオカミとは異なる点、M₁の

長さが日本列島にかつて棲息していたオオカミのその範囲には全く含まれない点、寧ろ、 M_1 の長さや下顎骨長は、系統関係を抜きにして考えるとオホーツク文化の時期に見られる大型犬に近い点、「秋吉褐色粘土層」の時期に共存していた、本標本と「ニホンオオカミ」とを動物学的に同一種であるとは見做し難い点などから、オオカミではなく、イヌであることが明らかとなった。

そして、本標本の M_1 の長さは秋吉台出土の同時期のイヌの標本と比べると著しく長く、その差は2.4～3.4mmもあった。このことから考えても、本標本がいかに大型の標本であったかが理解できよう。とすれば、秋吉台には、「秋吉褐色粘土層」が形成された時期に、縄文犬とほぼ同じ大きさの小型のイヌと、それよりはるかに大型のイヌの二種が同時に並存していたことになる。これは一体何を意味するのであろうか。系統の異なるイヌが棲息していたのであろうか。それとも、二種のイヌは同一集団内で飼養されていたのであろうか。いずれにせよ、「秋吉褐色粘土層」の時期に、秋吉台の狭い地域に大小二種のイヌが並存していたことは殊の外興味深いものがある。

特に、本例の M_1 の長さが、Ain MallahaやHayonim段丘などの、西南アジア各地から出土している世界最古のイヌの標本とほぼ等しい点は、極めて注目すべきことと言わねばならない。本標本は西南アジアの事例と同様、イヌの家畜化の起源にごく近い時期のものであろうか。然るに、西南アジアとは異なり、日本列島には更新世後期の時期に、小型の縄文犬の祖先となるような小型のオオカミは棲息していなかった。それとも、北海道のオホーツク文化の時期に見られるような後世の時期の大型のイヌであろうか。あるいは、ごく最近の大型のイヌが混在したのであろうか。それにしても、大型犬は北方大陸方面にその系統が求められ、樺太経由で日本列島に持ち込まれた、と考えられているので、中間地帯の様子がはっきりしているとは言えないが、本州の西端に位置する秋吉台から飛び離れて一点だけ大型のイヌが出土している点は、いささか奇妙であると言わざるをえない。それとも朝鮮半島経由であろうか。

因に、最近、東北地方の後・晩期の遺跡から中型犬が出土している報告例が増加している。先に紹介した、縄文後期から晩期にかけての時期の土器が出土している田柄貝塚や晩期中葉頃と考えられている前浜貝塚から出土している、 M_1 の長さが21.0mmの標本や、大洞貝塚から出土した22.0mmと21.0mmの縄文晩期の標本などが、そうした資料に相当しよう。これらについては、別系統のイヌの流入もしくは別系統のイヌやオオカミとの交雑の結果とするよりも、集団内で選択された結果である、と考えられている。秋吉台でも、丸山の穴例の他に、時期は不明であるが、鷹ヶ穴から M_1 の長さが21.4mm、下顎骨長が135.5mmの大型のイヌの標本が出土していた。もし鷹ヶ穴の標本が丸山の穴や風船穴などの秋吉台から出土している他の標本と同時期のものであるとすれば、秋吉台でも東北地方の後・晩期と同様、小型のイヌを集団内で選択して次第に大型のイヌを作っていったことが考えられるかもしれない。この点については、今後十分検討する必要があると思われる。

いずれにせよ、本標本については、年代が完新世のいつの時期であるかが明確でないので、早急な結論を下すことは避け、資料の一層厳密な骨学的研究を行うと共に、関連資料の増加を待つことにしたい。

3

以上、 M_1 の長さが23.8mmの原村中学校近傍遺跡出土例、23.1mmの上川名貝塚出土例、22.2mmの丸山の穴出土例の三個の標本を取り上げ、検討してきた。これらの標本はいずれも、 M_1 の長さが従来報告されていたイヌの範囲にも、オオカミの範囲にも含まれない特異な資料であった。

イヌの家畜化の起源を考究するさい、イヌとその祖先として最も有力なオオカミとを何を基準にして判別すべきかは最も重要な問題である。従って、これらの標本がイヌであるかオオカミであるかは、諸外国の事情と同様、イヌとオオカミとの判別を含むイヌの起源問題とも係わる甚だ重要な問題であると言えるのである。

検討した結果に拠ると、原村例は M_1 の長さが23.8mmあり、「石器時代の狼」の範囲24～28.2mmからは若干外れている。しかし、骨相や大きさはイヌではなく、ニホンオオカミ的であった。縄文後期の所産であるが、イヌと同様手厚く葬られていたことを考えると、飼養されたニホンオオカミであろうと推

測される。M₁の長さが若干短くなっているのは、他の動物で既に指摘されているように、飼養の影響と考えられる。本例は、イヌの家畜化の起源とは年代的にみても直接関係があるとは言えないが、オオカミを飼養してイヌを作った、というイヌの家畜化の過程の一場面を窺わせる一つの資料となりうるものと思われる。この点で、本標本は大層興味深い資料と言えるのである。

次に、M₁の長さが23.1mmある上川名例は、縄文文化期のイヌの中に類例を見出すことはできないが、大型犬であることは間違いない。また、所属時期は表面採集品のため残念ながら不明である。しかし、上川名貝塚では縄文早期後半と前期初頭の二時期の貝層が発見されているので、本例が縄文文化期のものとするれば、それらの何れかの時期のものということになる。但し、本標本で留意しなければならなかったのは、現生の大型犬である秋田犬の中に大きさがほぼ等しい資料が見られる点であった。このことから、本標本を後の時代の大型犬である、と考えることもできるわけである。然るに、現生家犬との間に明らかに骨学的な相違点が指摘できることなどを考えると、その可能性は極めて低いと言える。寧ろ、筆者は、本標本が縄文前期初頭の上川名Ⅱ式土器の時期の貝層から出土したのではないかとした江坂輝弥氏の見解を重視したい。出土状態についてはもはや確かめようがないが、もしも氏の見解が正しいとすれば、縄文前期初頭の頃東北地方には既に大型犬が棲息していたことになる。大型犬は、縄文文化期では日向洞穴から草創期初頭のものが一例報告されているのみであり、両者の間に系統関係があるか否かは明らかでない。寧ろ、大型犬はその系統が東北アジア方面や樺太に求められる、と考えられているので、本例は、縄文前期初頭の頃、北方大陸方面から日本列島へ流入してきた異系統の大型犬ではあるまいか。とすれば、類例が見つからないことも自ずと納得がいくことと言える。そして、東北アジア方面に原産地があるモウコノウマの遺骨が本大型犬といっしょに発見されていることも、そのことを裏付ける一つの証左と言えるかもしれない。

最後の丸山の穴例は、秋吉台の石灰洞から出土した他の資料と共に、鹿間時夫博士らにより更新世後期の「wild dog」として報告されていた。M₁の長さが22.2mmあるが、現生家犬との間に骨学的な著しい相違が認められないことなどから、明らかにイヌであると言える。しかし、博士らが更新世後期と見做していた「秋吉褐色粘土層」は完新世の時期の堆積層であったので、標本は完新世のイヌということになる。それにしても、本例は縄文犬よりは勿論、中尾洞などの他の石灰洞出土の標本よりもはるかに大型の標本であると言える。特に、M₁の長さが西南アジア出土の最古のイヌの資料と大差ない点は甚だ興味深いものがある。日本列島でも西南アジアとは全く無関係にイヌの家畜化が達成されたのであろうか。しかしながら、先行する更新世後期の時期に、日本列島に棲息していたのは、イヌの祖先となりうるような小型のオオカミではなく、大型のシベリアオオカミ系のものであり、従ってそれを家畜化したとは到底考えられない。因に、秋吉台からは、本例とは別に、縄文犬とほぼ等しいM₁の長さを持つ小型のイヌが出土しているので、当地域には大小二種類のイヌが棲息していたことが理解できる。異系統の大型のイヌが棲息していたのであろうか、それとも集団内で選択された結果であらうか、あるいは全く別の解釈が必要であらうか。これについては、未発表資料を含めた個々の標本の一層厳密な骨学的研究を行うと共に、多方面からの検討が必要と考えられるので、今後の課題として残しておきたい。

このように、本稿で取り上げた三例の標本は、イヌとオオカミとの判別をはじめ、イヌの家畜化の起源やその系統を考える上で何らかの手掛かりを与えてくれる資料と考えられる。従って、今後は、新資料の発見に努めることは勿論、関連資料の探索を一層積極的に進めると共に、改めてそれらの標本の骨学的研究を行う必要があると思われる。

なお、本論文作成にあたっては、いわき短期大学助教授山崎京美氏から動物学や古生物学などに関して多くの御教示をいただいた。記して厚く御礼申し上げる次第である。

〔追記〕

引用文献、参考文献については紙数の関係で割愛せざるをえなかった。御容赦願いたい。いずれ補いたいと思う。

(平成11年11月20日稿了)

(湘南短期大学教授)